



ガニ沢向いのカツラ巨樹

画 宇津木隆

～ 季節 だより ～

奥多摩に棲む動物たち

今回は、住民生活と関わりの深い動物について、地元の皆さんから聞き取った話題を提供します。

1 シカ

沢の石をなめているシカが目撃された。塩分補給をしていたのではないかと推測される。どうも登山者のオシッコが原因のようだ。

シカは、年間を通して青々しているワサビの葉を食べている。このような農作物被害だけでなく、森そのものを荒らすシカは、毎年350頭ほど駆除されている。

2 イノシシ

《昔の捕獲法》 60年以上前、イノシシをワナで捕まえた。仕掛けは、生えている樹木をイノシシの通る道に、生木のまましならせて地面に突き刺し、その真ん中にワイヤーを輪にして木に縛っておく。そして、あとは待つだけ。

イノシシが頭から突っ込んできて引っかかると、木が跳ね上がると同時にワイヤーが締まる仕組み。捕ったイノシシは、皮を剥いで売り、肉はどうし

たかなあ。

《農作物被害》 サツマイモ、ジャガイモなど、収穫時期が迫り、人が掘り取ろうとする前夜、イノシシがキバと鼻先で畑を掘り起こし、すべて食べてしまう。

3 サル

ワサビ田での収穫作業を見ていたサルが、人がいなくなったワサビ田で、ワサビを引き抜く姿が見られた。これは猿真似なのか、それとも単に餌のサワガニを探したもののか。

畑のトウモロコシ、ナス、キュウリを、その場で食い荒らす。カボチャを両手に抱えて逃げる姿が目撃されている。逃げる時には、電線を伝って行くこともあるとか。

このような被害を無くす対策のため、町の観光産業課では、サルに発信機を付けて動向を監視している。

4 クマ

留浦集落の鳥小屋をクマが襲って鶏を食べたそう。ツキノワグマは木登りが上手だ。柿も大好物で、収穫は人間とクマとの競争となる。

～ 赤 さ っ せ ん ～

鳩ノ巣城山登山

コース：古里～城山～鳩ノ巣

開催日：11月25日(木)

奥多摩には、年間を通し登山者が訪れる山が多い。そんな奥多摩の山にありながら意外に登られていない山を紹介します。

JR青梅線の古里駅を過ぎ、間もなく車窓から一際目につく均整のとれた三角の山、一度は登って見たくなる山容をしているのが鳩ノ巣城山(759.8m)です。

今回は、古里駅から鳩ノ巣に下る比較的ポピュラーなコースを紹介します。

駅から国道を奥多摩方面に歩き「大多摩ウォーキングトレイル」の標識に沿って進むと、やがて多摩川に架かる寸庭橋に着きます。橋を渡りきった所から山道へと入り、道は直ぐに越沢沿いの道となります。越沢に架かるほたる橋を渡ると、植林帯の登り坂となります。急坂を登りきった所に休憩所があり本仁田山の展望が素晴らしいです。

ここから御岳山への裏参道を、大櫛峠を目指し足を進めます。途中に迫力のある「越沢バットレス」

を対岸に見ながら歩き、今は無人の家が残るだけになってしまった越沢の集落を通り、やがて緩やかな登りとなり大櫛峠は間近です。

峠は明るく、コナラの巨樹があり休憩するのに格好の場所です(ここで昼食をとるのも良い)。

峠からは、指導標の「上坂」方面に道を取り、味わいのある尾根歩きとなります。15分程度で、左に上坂へ下る分岐に着きます。ここは下らずに尾根道をさらに進むと小櫛峠に着きます。この峠は、明治時代まで越沢と上坂の住民が行き来していたという峠のようです。小櫛峠からは最後の登りとなり鳩ノ巣城山「三等三角点」に着きます。山頂は杉林の中のため展望は望めませんが、その昔「城」があったという伝説にふさわしい広い場所です。

ひと休みしたら、鳩ノ巣駅を目指し急坂を一気に下ります。道は明瞭なので迷う心配はありませんが、急坂のため足元に注意して下ります。

50分程度で坂下集落の車道にでます。あとは多摩川に架かる雲仙橋を渡り国道を渡れば鳩ノ巣駅に着きます。

(清水隆芳)

～ 行 っ て 赤 た ん ぽ ～

金岱山に巨樹を訪ねる

「金岱山に巨樹を訪ねる」の下見を、7月7日(金)に行ってきた。日原・鍾乳洞先の登山口から登り始めました。目指す金岱山は1325m。いきなり急峻な坂を、ゆっくりと石を落とさないように慎重に歩きました。ある程度いくと分岐が出てきて、足元が落ち着いてきました。辺りは苔むした原生林がひろがっていました。大木が目につき、まるで屋久島のような感じでした。さらに登っていくと目指す「ミズナラの巨樹」に着きました。登山口から2時間半強。久しぶりのミズナラは、根っこを保護するために「囲われもの」になっていました。それでも堂々たる姿で出迎えてくれ、圧倒されたと同時に感動しました。

この林床は、不思議なことに笹も草も生えていない、ただ落ち葉が積もり大木が立ち並んでいました。見とれていると自分がすごく小さく感じ、大自然の一部になったようでした。

ここまでは通常のコースとして登っていましたが、この先の人形山、金岱山は初めてで、なだらかな、はっきりしない道が続き、まもなく人形山の標識が出てきました。

そして踏み跡をたどって歩いていると、目の前に急登が出てきて「あっ、野鳥が数羽飛んだ、身体がグレーで喉がオレンジ…ウソだぁ～」と叫びました。会うのは数年ぶりで最近見ていなかったのが感動ひとしおでした。この急登を巻いて、空腹を抱えながら「山頂はどこだ？」ときつかった。ミズナラ巨樹から40分弱、やっと金岱山の標識を見つけ「着いたよ～」と歓声をあげました。

達成感と一緒に、うれしい昼ごはんになりました。下山はトットと下りました。このコースは、ミズナラやブナなどの美しい天然林がひろがっていました。

こんなに感動した山歩きだったのに、本番は残念ながら雨天中止となりました。(武田和代)

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その17 ～

「本仁田山のトレイル・ランニング事故」

7月8日、蒸し暑い梅雨の晴れ間である。午後3時06分、消防庁からの転送で「山岳遭難事故」の110番通報が入った。本仁田山で女性が転落したというものである。転落した女性の同行者からの通報だという。私は通信指令本部から聞き取った通報者の携帯電話にプッシュした。女性が出た。女性はMさん(43歳)と名乗った。今日友人と2人でトレイル・ランニング(登山道を走ること)をしに奥多摩に来て、10時30分ころ安寺沢登山口から本仁田山に登った。さらに川苔山まで足を延ばし頂上に立った後、再び本仁田山に戻り、花折戸尾根を鳩ノ巣に降りようと下って行ったところ、岩場に出てしまった。同行のTさん(48歳)が下の様子を見ようと腰を下ろし、足を揃えて落ち葉を滑って行ったところ、斜面が急になり止ることができず、そのまま下に落ちてみえなくなってしまった。

Mさんは尾根を少し戻り、傾斜の落ちた辺りから回り込んで岩場の下に降りた。そこに傷だらけになったTさんが倒れていたという。そして今はTさんの側にいるとのことであった。私はMさんに聞いた。「Tさんは呼吸をしていますか。」「していないようです」という。「花折戸尾根の分岐からどのくらい下った所ですか」と聞くと「20分くらいだと思います」との答だった。「すぐ向いますから動かないでいてください。救助隊の声が聞こえたら返事をして下さい。」と言って電話を切った。

山岳救助隊を招集し、午後3時30分、集まった4人で先発。花折戸尾根から入山した。

鳩ノ巣の消防団庫の脇から登る。白丸ダムのある辺りで下に声を掛けるが応答はない。湿気のある梅雨の晴れ間は暑い。大汗をかいて切り開かれたカヤトの原を過ぎると広葉樹の尾根となる。南側が岩場になっているので、大声で下に向かって叫んでみるがこれも応答がない。

1時間10分ほど登ってゴンザス尾根と花折戸尾根の分岐に着いてしまった。ここには3方向を指す道標がある。本仁田山方向、奥多摩駅方向、それに花折戸尾根の鳩ノ巣方向である。

ゴンザス尾根を少し下ってみる。新しい足跡は見あたらない。再度分岐まで引き返す。消防の後続隊が到着し休憩していた。そこへチクマ山より上部を探している山内小隊長の班から無線が入

った。除ヶ沢(よげさわ)の方から小さく声が聞こえるという。私は市川隊員に「行くぞ」と声を掛け、チクマ山方向に急いだ。市川隊員は今年3月に鳩ノ巣駐在所に赴任してきて、山岳救助隊のメンバーに加わった最も若い隊員だ。

チクマ山を過ぎて左側の谷、除ヶ沢に向って「おーい」と大声で呼びかける。小さく女性の声で応答があった。除ヶ沢の右岸の方だ。このゴンザス尾根から対岸に迷い込むのは不可能だ。往きで登った大休場尾根を下り、途中から枝尾根に迷い込んだのかもしれない。4、5年前も道迷いの救助要請があり、今と同じような所から声が聞こえたので、除ヶ沢上部から下りて行き遭難者の青年を発見し、大休場尾根側に無事救助したことがあった。

私は市川隊員と傾斜の落ちた除ヶ沢上部から沢に入った。以前に下ったことがあるから、地形は覚えていた。下の方に東京消防庁のヘリが飛んでいるのが見えた。途中から右岸にトラバースし、枝尾根をひとつ回り込む。さらに岩尾根を回り込むと、目の前にヘリコプターが現れた。ホバリングしているから、現場はこの岩尾根の下なのだろうと見当をつけ、少し戻って岩尾根を下から回り込んだ。上のヘリから航空隊員がホイスト下降しているのが見えた。

私は市川隊員と上に見える岩尾根の下に急いだ。岩場の下に女性の姿を確認した。私は消防庁の航空隊員2名と同時に女性の側まで登り上げた。女性は通報者のMさんであった。Mさんの側には傷だらけのTさんが倒れていた。

目の前には屏風のような岩尾根が立ちはだかっている。30メートルはあるだろう。Tさんはここを転落してさらに20メートルほど斜面を滑り落ちて止まったのだ。私は消防の航空隊員と協力し、Tさんの小さなザックを体から外した。Tさんの四肢の関節は不自然に曲がり、Tシャツの体は冷たくなっていた。

さらに2名の航空隊員が担架を持ってヘリから降下してきた。4名の航空隊員でTさんを担架に乗せセットしている間、私は杉の立木を利用して担架確保の支点を作り、ザイルをセットした。市川隊員はMさんから事情を聴取していた。

すべてのセットが終わり、現場から約40メートル下のヘリ吊り上げ地点まで担架を移動する。航空隊員と市川隊員が担架に付き、私がザイルをエイト環で確保しながら降ろした。

ヘリが進入してきてホイストが降ろされた。Tさんの担架はホイストに連結され、航空隊員と一緒にピックアップされる。すごい風圧のなか誘導ロープを下で操作し、担架はヘリの中に収容された。Mさんと残りの航空隊員も次々とヘリにピックアップされ、ヘリコプターは青梅市立総合病院に機首を向けて飛び去った。

その後、ゴンザス尾根を山頂直下まで登り、大休場尾根を回ってトラバースしてきた高田副隊長や消防の救助隊員も駆け付け、現場の写真を撮るなどの見分をした。夕闇が迫ってきた。

さて帰りが問題だ。暗闇の中をヘッドランプの灯りのみで、踏み跡のない急斜面を大休場尾根登山道までトラバースしなければならない。

声を掛け合いながら慎重に前進する。最後の急斜面を大休場尾根の登山道まで登り上げたら、もうみんなクタクタで座り込んでしまった。

午後8時20分、全員下山し奥多摩交番に引き上げたが、遭難者Tさんは午後7時44分、青梅市立総合病院で死亡確認されたと報告を受けた。残念な結果となってしまった。

2人はどこで迷ったのか、いつか検証しなければと思っていた。7月11日、東京都レンジャーの師岡さんと田畑さんが事故現場に行きたいというので、私が同行することにした。

安寺沢から大休場尾根を登る。地図上、尾根の上部1070メートル付近で除ヶ沢に落ち込む尾根があり、そこで迷ったのではないかと見当をつけ登ったのだが、その尾根には踏み跡がなく、登山道ははっきりしているので迷う要素はない。そのままゴンザス尾根の分岐点まで登る。分岐には3方向を示す道標が立つ。本に田山方向、安寺沢方向、花折戸尾根方向である。花折戸方向に入ってみる。20メートルほど行くと登山道が分かりにくくなる。細い緑色のロープが進行方向に15メートルほど張ってある。そのロープの左側を下るように張った誘導ロープなのだろうが、もしロープの右側に入ったらどうなるだろう。地図を見ると、ロープの右側は傾斜のきつくない尾根状斜面が真南の除ヶ沢上部に落ちている。「私でもどちらをとるか迷いそうだ」とレンジャー師岡。私は何度も来ているから、東側の斜面を少し行けばジグザグにゴンザス尾根に続く踏み跡に出ることは分かっているが、知らない人なら迷うかもしれない。

私はレンジャーの2人と別れ、その南側に派生する尾根に踏み込んで行った。広い歩きやすい尾根だが徐々に急になる。自分でコースを選びながら下降すれば、それほど難しくはない。2人が迷

ったと思われる新しい靴跡は確認できた。ただ登山道らしきものはないのだから、迷ったと感じつつも下って行ったものだろう。

約15分下ると尾根の西側が岩場となり、末端が急に切れ落ちている。Tさんはこの西側の岩場の下を覗こうとして転落したのか。

私はトレイル・ランナーの2人がこの尾根に迷い込み、過って転落したものと確信を得て、再び尾根を登り返した。

上ではレンジャー師岡とレンジャー田畑の2人が先ほどのロープの手前に10メートルほどロープを継ぎ足して、右側の尾根に入れないようにし、準備してきた「花折戸尾根」の簡易矢羽根を立木に取り付けていた。これで取りあえずこの尾根に迷い込むことはないだろう。

山の中を走り抜けるトレイル・ランニング。登山者に、この行為の評価はまちまちである。しかし愛好者は確実に増えており、競技会の開催も多くなっている。そして何より事故が増え、トラブルなども多く発生している。遭難したTさんは、名のあるクラブに入り、レースにも度々参加し入賞するなど、力のあるトレイルランナーだったらしい。

「トレイル・ラン」。レースや事故防止のことなども含め、これから登山界の大きな課題といえそうだ。

* * *

私は今年の3月から知人に誘われて、さる俳句の会に入った。昔から俳句を読むことは好きであったが、自分で詠むことはしなかった。いずれ年をとり、そういうチャンスがあったら教室にでも入り、勉強してみたいとは考えていた。

実際やってみると、いやこれがおもしろい。そして奥が深い。講師の鎌田先生は91歳だ。私ももっと早くやればよかったなあとは思いますが、そんなことを言ったところで仕方がない。今になってこんなおもしろいものに巡り会ったことに感謝して、焦らず精進していきたい。

迷ひつつ 地図を酷暑の山に置く

私が20歳のころ、森田公一とトップギャランというグループが歌っていた「青春時代」という曲があった。「青春時代の真ん中は、道に迷っているばかり」という歌詞があり、私も共感し好んで歌った。そんなイメージと、Tさんの遭難のことを句に込めたのだが…。

(青梅警察署囑託員 山岳指導員 金 邦夫)

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(19)

「原」、「河内(こうち)」、「川野」、「留浦(とずら)」の地域は、古くは小河内郷(おこうちごう)という一つの村でした。江戸時代の初め頃も武州多摩郡三田領小河内原村とか小河内之内川野村と称していましたが、中頃からは、武州多摩郡原村などとなり、明治5年(1872)神奈川県に編入、しばらく小村のまま推移しましたが、明治22年市町村制施行により、古里村、氷川町と同時に小河内の4村は、旧名を名乗って小河内村となりました。明治26年には、三多摩が東京府へ編入されました。

小河内とは郷の中心地、河内(かふち・こうち)の上へ「を」を冠したもので、「を」とは、麻(を)とか苧(お・を)(からむし)の意ととられています。河内の語源は、周囲に水をめぐらした所のことで、小河内の河内も三方を水で囲まれた地形でした。日本の地名につく小(お)は、物の大小をあらわすよりも、その地へのいとおしさをこめた場合に使われていることが多いといわれています。

さて、「往古、山の嶺を生業とする兄弟が「のの

たわ」の袖小屋に寝ていると、「新三、権三よ、大将様がお呼びぞ、急ぎ帰ってこようや。」という彼らの母親の声荒く呼ぶのが聞こえました。夜中のことゆえ「さてはもののけの仕業なるか。」と、弓矢を取って飛び出すと、いかにも恐ろしげな山姥が、「あたみ」の上ノ山から呼ばわっているのが見えます。二人は、耳打ちして同時に矢を放つと、くだんの妖怪は、「あたみ」の集落まで転がって来て、あい果てました。その後、妖怪の怨霊が祟って村人に禍を及ぼしたので、巫女に伺わせると「四十二の塚を築いて祀り込むがいい。」というご託宣でした。村人は総出で村内の所々に塚を築いていき、いよいよ日が暮れる頃、まじまじ墓にまんじ塚を築き、最後に築いたのが四十二に分けた最後の骨を祀り込んだ「四十二塚」でした。

この話にまつわる塚跡や宝篋印塔など、また、「四十二」という家号が水没前の小河内にありました。

【資料】 奥多摩町誌、広報おくたま、小河内貯水池郷土小誌

(岡部義重)

奥多摩歳時記

好みの木の実は?

秋は、「食欲の…」、「勉学の…」、そして「芸術の…」などと形容されますが、その中で万人に受け入れられやすい言葉が、「実りの秋」ではないでしょうか。

そこで、今回は、山で食べられる実(種子)について話題を拾ってみました。果実酒など手間をかけてからでない口に入らない実は除外し、あくまでも生食できる実に限定しました。

山の場合、草の実意外と少ないのですが、その中で美味しいのは、シロバナヘビイチゴです。少し標高が高い場所に生育しますが、その味には上品な甘味があります。ただ、小さいのが難点です。

比較的人の目線に近い位置に実をつける灌木類では、ガマズミの仲間が、その色彩とあいまって目につきます。実が赤くなってもすぐには食べられず、霜が降りて、実が半透明になってから食べます。少し酸味がある甘さです。「ズミ」とは「酸実」のことであると説明している文献もあります。

少し背の高い樹木では、ヤマボウシの実が美味しいです。マンゴーの味がする、と書かれた文を読ん

だことがあります。マンゴーの味かどうかは別として、独特の甘味があります。

背の高い樹木やつる性植物の実は、落ちて実を拾って食べる場合が多いですが、運が良ければ、枝から摘み採ることもできます。サルナシやミヤマタタビはキウイフルーツの仲間、大きさこそ小さいですが、甘味があって美味しい実です。またヤマブドウは、果肉が少なくタネばかりが口に残りますが、酸味が強く野趣味あふれる味がします。

ブナは、落ちて実しか拾えませんが、香ばしくて美味しい実をつけます。残念ながら、豊作年(6,7年おき)以外では、シイナ(糶:殻ばかりで実が入っていないもの)が多いのが難点です。

針葉樹にも生食できる実をつける樹種があります。イチイがその代表例でしょう。雌木(雌株)にしか生りませんが、実の先端に黒いタネを覗かせた赤い実は、見た目にも美しく、食べると非常に甘くて美味しいです。ただ、黒いタネは有毒のようですから、果肉だけを食べるようにします。雲取山直下の大ダワ近くに、この巨樹があり、沢山の実をつけます。

(堀越弘司)

ガイドだより ～三匹獅子舞～

奥多摩町では民俗芸能と言われるものが、昨年は三匹獅子舞が14集落、お囃子が2集落、鹿島踊・車人形・夜神楽が1集落行なわれました。

今回はその中で「三匹獅子舞」についてお話しましょう。奥多摩の獅子舞の歴史は古く、約500年前に小留浦の山祇神社に伝わったのが獅子舞の元祖と言われております。当時から祭礼は精神的・宗教的な以外に、自己及び地域共同体の確認の場であったのだろうと推測されます。現在の獅子舞は長い歴史の中でそれぞれに工夫改良されてきたり、祭りの行われる季節や条件で地域ごとに幾つかの違いがでてきました。以前は近くの神社の境内で春・秋に行われておりましたが、現在では主に町外に転出した人々の集まる8月の休日に大半が行われています。見物人は石積みのひな壇で、お神酒とご馳走を食べながら神様と一緒に一日を過ごします。

ある獅子舞会場では、「この獅子は声援とヤジが大好きです。」と紹介されますと、獅子は観衆の声援に応じて地上高く飛び上がり、会場は盛り上がります。

今年、棚沢の熊野神社では久し振りに地元の親・子・孫による「三代獅子舞」が上演されました。大太夫(福島真佐雄氏 72歳)、小太夫(功章氏 45歳)、雌獅子(功一郎君 12歳)で獅子舞が演じられ、お互い三匹の獅子は、他の獅子を気遣いながらも力強い演技で満場の喝采をうけました。

集落全員が伝統を重んじ、次世代に継承する心意気に老若男女の区別無く地域全員で取り組む姿勢が素晴らしいと思いました。演目最後の「千秋楽」が終ると人々は来年の獅子舞が今から始まることを、全員認識するのです。私は獅子舞が終わり薄暗い夜道を一人帰って来るとき又、来年再会できることを期待しつつこの素晴らしい民俗芸能が未永く引き継がれていくことを、いつも祈りつつ帰路につくのです。(吉羽 秀夫)

《奥多摩の花・百選》募集中

奥多摩に咲く花 100種類を皆様から募集しています。四季折々に奥多摩の地で咲く野の花・山の花、谷川や岩場に咲く花等 100種類を選びます。

応募要領：原則として1人10種以内。ぜひ、花への思い出や好きな理由等を添えてください。

(詳しくは観光協会へ)

施設案内

「一心亭」

手打ちそば・鳩ノ巣一心亭が、このたび丹三郎に新たに開店しました。小宴会、法事などもご予算に応じて受けております。

電話：0428-85-2231 (定休日：火曜)

住所：奥多摩町丹三郎40

古里駅または川井駅から徒歩15分

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、初秋から冬に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドのご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

- ① 10月28日(木) 紅葉の鹿倉山を訪ねる
応募締切日 10月15日(登山)
- ② 11月4日(木) 紅葉の奥多摩湖右岸15キロを歩く(いこいの路)
応募締切日 10月22日(ハイキング)
- ③ 11月17日(水) 紅葉の倉戸山を訪ねる
応募締切日 10月22日(登山)
- ④ 11月25日(木) 鳩ノ巣城山登山
応募締切日 11月12日(登山)
- ⑤ 12月7日(火) 金岱山で冬の樹形を楽しむ
応募締切日 11月25日(登山)
- ⑥ 12月16日(木) 冬の奥多摩の野鳥を探そう
応募締切日 11月25日(ハイキング)
- ⑦ 21世紀の宝探しシリーズ
大丹波地区を皮切りに、12月5日から3月までの間に10回開催します。詳細は、イベントカレンダーをご覧ください。

募集人員：各回30名、参加費：500円

次号は、平成23年1月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2162 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会